樋口万太郎 著

はじめての3年生担任

4月5月のスタートダッシュ

START!

DASH!

東洋館出版社

はじめに

本書は３年生、そして４・５月に特化した本です。

学級づくりの類書にあるような、１年間の実践を載せ、先を見通して学級経営や授業づくりをしていくことは大切なことです。異論はありません。

しかし、先を見通すもなにも、４・５月の２ヶ月間を失敗してしまってはどうしようもありません。

そこで、本書では【４・５月の２ヶ月間をスタートダッシュしよう】ということをテーマにしています。

３年生、４年生の中学年を初任の先生や若手の先生が持つ傾向があります。１年生や５・６年生といった学年よりも持ちやすいというイメージがあるのでしょう。

私はこの教師という職業は知識と同様に経験も大切だと考えています。若い方はこの経験が少ないのはあたりまえのことです。

しかし、そのせいで学級が崩れてしまい、高学年で力のある先生が立て直すという話をよく聞くことがあります。

でも、それは経験、力が足りていない先生がすべて悪いのでしょうか。もちろん、悪い面もあることでしょう。でも、すべてではありません。私はシステムが悪いと思っています。初任の先生の多くは、４月に子どもたちに出会う１週間前までは、大学生だったのです。たった１週間、168時間で環境が大きく変わるのです。

ただ、そうは言っても現実が待ち受けています。そこで本書では【４・５月の２ヶ月間をスタートダッシュ】するための大切なマインドも書きました。マインドを知ることで自分の行動も変わってきます。

みなさんが、小学校３年生のときの担任の先生の名前を覚えているでしょうか。ほとんどの方は覚えていないのではないでしょうか。一方で、６年生の担任の先生の名前は覚えていることでしょう。そんなもんです。でも、将来、名前は忘れられたとしても、子どもたちの根本の力をつけていく、そんな１年になるようにまずは、４月・５月をスタートダッシュしましょう。

樋口万太郎

もくじ

1章 イマドキの3年生 7

3年生ってどんな子ども？……8
現在の社会と3年生……11
黄金の３日間……16
GIGAスクール時代の子どもたち……19
イマドキの保護者……22

2章 ４月に大切にしたいこと 25

４月の自己紹介……26
子どもたちの名前を覚えた方がよいけれど……28
３日間で何をするのか……30
国語の授業開き……32
算数の授業開き……34
九九を覚えていない子……38
係活動……40
係活動をふりかえる場……42
給食指導……43
給食当番……45
朝の会・帰りの会……46
ノート指導……48
習字……50

方角を覚えることができるアクティビティー……52
４月の会議を乗り切れ……54
４月末の参観はこれ！……56

3章 ５月に大切にしたいこと 61

ゴールデンウィーク明けに……62
１学期の総合的な学習の時間で何をする？……64
時刻と時間……66
国語辞典の学習のときには……69
４・５月の漢字のまとめテスト……70
オリジナル地図記号を作ろう……71
失敗させよう！……72
学級のシステムを見直す……74
比較する対象は……76
学習規律……78

4章 トラブル対応 79

申し送り……80
叱ってはだめ？……83
安全面に厳しく……84
電話対応……85
トラブル……86
トラブルが起きたときには……88
トラブルを活かす……90

トラブルの火種が事前につぶしておく……92
正しく喧嘩をする……96
ありがとう・ごめんね……97
さりげない一言……98
物が壊れていた……99
すぐに手が出る子……100
落書きをした子……101
告げ口をしにくる子……102
物がなくなります……103

5章 タブレット端末を使った実践 105

タブレット端末をどんどん使おう……106
毎日の連絡はclassroomで……108
自己紹介……110
企画書……112
1週間のふりかえり、来週の目標立て……113
自分のペースでプリント学習……114
国語科「きつつきの商売」のゴール問題……116
算数「かけ算」のゴール問題……119
フラッシュカードが便利……120

6章 ミニトーク 121

席替え……122

実際に出した学級通信……123
音読……126
怪我対応……127
掲示物の賞味期限……128
聞く姿勢……130
参観授業前にすること……131
連絡帳……132
板書は丁寧に書こう……134
授業づくり……136
話や指示を聞けずに準備が遅れがちな子……137
同じ子ばかりが手を挙げる……138
やる気もなく、取り組まない子がいる……139
筆圧が弱い……140
スキマ時間……141
こういう姿をほめよう……142
こういう姿をほめよう～学習面～……144
想定してこなかった考えが出てきたときには……149
教科書に出てくる考え方はすべて扱う？……150
授業最後には決めゼリフ……152
情報を集める→情報を整理する分析する→情報をまとめる
を位置づける……153
最後に……154

参考文献……156

1章

イマドキの3年生

3年生ってどんな子ども？

３年生（８歳～９歳）と聞くと、どのようなキーワードを想像しますか。

・中学年
・ギャングエイジ　（最近あまり聞かなくなったような…）
・成人まで残り半分　（残り半分なことに驚きます…）
・９歳の壁（最近、何歳にでも壁があるような…）
・中間反抗期

といったところでしょうか。

上記のキーワードの中で、あまり馴染みがないのが、「中間反抗期」という言葉ではないでしょうか。

一般的に『反抗期』は、大きく２つに分類されるといわれています。

第一反抗期：いわゆる「イヤイヤ期」と呼ばれる２～３歳ごろ
第二反抗期：小学校高学年～中学生の時期＝思春期
（子どもの反抗的な態度にイライラしてる！？　【“中間反抗期”の時期・特徴・対処法】より引用）

（https://kodomo-manabi-labo.net/middle-hankouki）

私たちの「反抗期」のイメージは、この第二反抗期のイメージではないでしょうか。

しかし、第一反抗期と第二反抗期の間にも反抗的な態度が現れやすく、この間のことを『中間反抗期』と定義されています。

小学校１年生・２年生の低学年であった子どもたちは、これまで自分のことを言いたい、自分のことを聞いてほしい、自分がやってみたいなど**「自分中心」**でした。

「ねぇねぇ、先生聞いてよ！」といった子どもの姿、友だちの発表を聞くことよりも自分の考えを優先してしまう子どもの姿は、まさに自分中心の姿といえることでしょう。

しかし、３年生になるとその姿が変わってきます。これまでは「自分中心」だったところから

「相手や集団をより意識」

するようになります。そのため、これまで以上に

- **相手を意識するようになる**
- **集団をつくろうとする**
- **集団の一員としての自分の役割に悩む**
- **集団における友だちとの関係に悩む**

ということが増えると感じています。

このように相手や集団をより意識します。その結果、相手や集団に関わるトラブルが多く起きます。しかし、こういったトラブルが起こり、話し合っていくことや考えることや悩むことは、

子どもから大人へと成長するために必要不可欠

なことです。

それでも、子どもたちは「子どもらしい」です。ここまでの文で、最近の子どもはこわいと思われたかもしれませんが、そんなことはありません。新納（2019）は「３年生の学級づくり」（日本標準）にて、

３年生が現在において、３年生が最も子どもが子どもらしく過ごせる最後の時間でないか、と感じています

と述べられています。

３年生の子どもたちは、戦隊モノやポケモンなどで◯◯ごっこをしていたり、外で汗だくになってドッジボールをしたりと子どもらしいです。

だからこそ、子どもならではの物事の考え方もありますし、悪気のない行動もあるというのが現実です。

３年生には、新たなことも始まります。学習面でいうと、理科や社会が始まります。習字が始まります。学校によってはクラブ、委員会が始まるところもあることでしょう。そういったことを楽しみにしている子もいます。

２年生のときよりも新たな取り組みが始まる学年です。その変化についていけるのか、こちらも子どもたちをみていくことが大切です。

こういったことを踏まえて、私は昨年度、学年の目標を「connect（コネクト）」と名付けました。これは一般的にいわれる３年生の様子を考慮して、決めたものです。また、スティーブ・ジョブズ氏の「Connecting the dots」という言葉から影響を受けた目標でもあります。

一人ひとりの子どもはドットです。一つのドットです。しかし、そのドットがつながることで、線になります。そして、その線と線が結ばれていくと図形になっていきます。その図形と図形を結ぶと…といったように、もとは一つのドットでも、つないでいき、大きな形をみんなで創造していくところに、子どもたちの関係づくりや学級づくりなどを思い浮かべたのです。これを１年間通して目指していくというメッセージです。

教師はドットがつながるように、サポートをしていくことが求められます。つながるということは簡単なことではなく、難しいことでもあります。

現在の社会と3年生

前節では一般的な３年生の姿について書いてきましたが、この節では今現在の社会について私が考えていることを述べていきます。

子どもと関係ないのでは？　と思われたかもしれませんが、子どもも社会の一員です。子どもの取り巻く環境に大きく関係をしています。

私は15年前に３年生の担任をしていました。読者である皆さんの中には、15年前は小学校中学年だった方もいらっしゃるのではないでしょうか。15年前と現在では大きく変わっています。

拙著「これから教壇に立つあなたに伝えたいこと」（東洋館出版社）でも書きましたが、失敗を許さない風潮がここ最近あります。15年前は失敗を笑って許してくれる雰囲気がありました。失敗をしても、その失敗をフォローする時間があったように思います。でも、残念ながら現在はあまりそれらを感じません。何か教師自身も消費され、失敗を許されず、すぐに解決策や成功へと導くことが求められているように感じます。

それは、なぜでしょうか。私が考えるに、

世の中のスピードが速くなった

ように感じるのです。スピードが速くなったため、失敗を許してくれないのです。

私もお世話になっていますが、流行を採り入れつつ低価格に抑えた衣料品を大量生産し、短いサイクルで販売するブランドがあります。ファストファッションと言われています。

また、執筆しているときに、テレビや動画を倍速でみるというニュースが話題になったり、音楽のイントロ部分を聞かずにとばすということが話題になったりもしました。サビから始まる曲も以前に比べると、多くあります。そのことに対して、昔の方がよかったのにと言うつもりはありません。私はサビから始まる曲も、B’zのようにイントロが長い曲も大好きです。

子どもたちの遊びである「ゲーム」も以前の家庭用ゲームからソーシャルゲームをする子も増えました。自分に不利益があるとすぐにゲームを終わらせようとしたり、リセットをしたりすることは昔からもありましたが、そのリセット方法が以前よりも容易に短時間で行うことができるように感じます。

短いサイクルでまわそうとしたり、すぐに結論や成功を求めたり、容易にやり直しをしたりするために、失敗に対して、特にふりかえることもなく、

子どもたちが失敗や責任に無自覚になっている

ような気がします。

ゲームの世界などでは何度もやり直しすることができます。しかし、現実世界はそれほど甘いものではなく、やり直しできることもあれば、やり直しできないこともあります。やはり、

自分の行動には責任が伴う

のです。これは子ども、大人関係のないことです。しかし、なにかこの「自分の行動には責任が伴う」という意識も薄れているように感じるのです。

世の中のスピードが速くなり、失敗を許さない雰囲気があるものの、そもそも子どもたちは失敗に無自覚になっているというなんだがアンバランスな

社会になっているように私は思うのです。

そして、今どきの３年生は、これまでの３年生とは大きくちがいます。昨年度（2022年度）の樋口学級の子どもたちは、

・入学式が４月ではない
・プールがはじめて…
・遠足がはじめて…
・タブレット端末があるのが当たり前
・グループ活動をあまり行っていない
・マスクをつけている（周りの目が気になる）

といった特徴があります。

この子たちは、コロナにより全国一斉休校になり、４月に入学式がありませんでした。翌年の子どもたちも制限の中の入学式だったことでしょう。

この子たちは、３年生でプールに初めて入りました。子どもたちは「初めてプールに入る！」「私、プールドキドキする」などまるで１年生の子どもたちのような反応をしていました。自治体によっては前年度から入っているところもあったことでしょう。でも、共通しているのは数年分の水泳の学習内容がないということです。３年生の水泳はクロールを行うところが多いと思いますが、数年分の水泳の学習内容がないために、取り組む内容を考え直さないといけません。

この子たちは、給食中にグループになり、話をしながら、給食を食べるという経験がありません。黒板の方を向き、黙食ということしか知りません。そのため、遠足でお弁当を食べるとき、シートをひき、距離は保ちつつも、お互いの顔を見ながら食べることが、遠足の内容よりも楽しいと言っている子もいました。

この子たちは、昨年度からタブレット端末が導入されていました。今年度の３年生の子たちなんかは、入学したときから当たり前のようにタブレット端末があります。

この子たちは、授業などでグループ活動をあまり行ってきてはいません。机も常時ソーシャルディスタンスをとり、黒板の方に机が向いている状態です。アクティブ・ラーニングといわれたとき、散々取り入れられたグループ

活動が幻のようになくなっていきました。

グループの中で話し合うことで、子どもたちは成長することもあります。だからこそ、

グループ活動を意図的に多く取り入れていく

必要があるとも考えています。昨年度、グループ活動を意図的に取り入れていきました。子どもたちのとても楽しそうに取り組んでいる姿がありました。

そして、最後に「マスク」という存在です。マスクをつけることが当たり前になっている子どもたちです。熱中症対策などで体育のときに外そうと言っても、自分のすべての顔を見られることを恥ずかしがる子どもたちが多くいます。これから先は、「マスクをどう外させていくのか」ということが課題になってくることでしょう。

前節では、３年生は「相手や集団をより意識するようになります」と書きました。これは「これまでの３年生」のことなのかもしれません。

「マスク警察」という言葉を数年前よく聞きました。マスク警察とは、マスクを着用していない人に対して過度の注意を促す人たちのことです。「○○さん、ちゃんとマスクをしてよ！」とやさしく言えばいいのに、厳しく言う場面にも何度も出会ったことがあります。厳しく言ってしまう子も悪くはないのです。その子自身が言われてきたことをしっかり守っているだけなのです。

過度の注意を受けないように、または周りの目を気にして、マスクをきちんとつけようと思っている子たちは多くいます。

つまり、

これまでの３年生以上に、相手や集団のことを意識して子どもたちは成長してきている

のです。ただ、これまでの相手意識とはちがうのです…。

マスクをしない人をみるとコロナ感染の不安と共に、「自分はちゃんとマスクをしているのに、あの人は…」「自分は我慢しているのに、あの人は…」といった気持ちがこれまで以上に出てきてしまうのでしょう。大人の私たちがそのように思うのですから、子どもたちはより思うことでしょう。

だから、その人にきつく注意をしてしまうのです。注意をする側は、自分の正義だと信じて行っているのでしょう。ただ、「マスクしてよ」と注意することは決して間違えていることではありません。きっと他の人も迷惑しているのではと考えているのかもしれません。他の人も…というのも相手意識といえることでしょう。

しかし、その「正義」は**相手意識がない**自分のことだけを考えている「正義」のように思います。

人によっては、マスクをしづらい状況のこともあります。体調面でもあります。でも、そこは考えることができないのです。

つまり、ここまでのことをまとめると、

相手を意識しているように見えて、実は「自分中心」の相手意識を発揮している

状況が子どもだけでなく、大人でもあるのではないでしょうか。

「相手中心」の相手意識であれば、相手の立場を思いやる気持ちがあれば、きっと厳しくは言わないはずです。

やはりコロナによって失われたものは大きいと言わざるを得ません。

黄金の3日間

黄金の３日間という言葉を聞いたことがあるでしょうか。黄金の３日間とは、子どもたちの多くがよい意味で緊張感をもち、学校生活を送る期間であり、この３日間で学級経営の基礎を築きあげることが、学級経営の安定に欠かせないといわれており、TOSSという団体によって名付けられたものです。

この黄金の３日間に対して、私は否定的ではありません。ただ、言葉が一人歩きしすぎていて、

「私の学級に黄金の３日間なんてありませんでした…」

「10分もありませんでした…」

という絶望にも近いSNSのDMで届くこともありました。

黄金の３日間が必ずどの学級にもあるとは保証されていません。もしかしたら１分かもしれません、１時間かもしれません、１週間かもしれません。目の前の子どもたちの状況によって変わります。

また、黄金の３日間だけで、学級経営の基礎を築きあげることは時間の関係で難しい場合もあります。特に初日なんかは配布物や教室移動などだけで終わってしまいます。

先程の絶望に近いDMに対して、私は

「確かに黄金の３日間はなかったかもしれません。でも、いくらでも取り戻すことはできますよ。むしろ、ここからが本番です」

「あまり気にしなくても大丈夫です」

という返信をしました。これは私の本心なのです。ここからが子どもたちとの長い付き合いです。あくまでこの３日間は１年間の学級経営の入り口なのです。

中村健一先生は、

> ４月の１ヶ月で、その学級が１年間うまくいくかどうか100％決まってしまいます。

と言われています。

野中信行先生は以下のように「３・７・30の法則」を提案されています。「３・７・30」とは、３日、７日、30日のことを表しています。

> ＜３＞と＜７＞は、どの教師もとても緊張した時間として過ごしていく。しかし、この時間が過ぎてしまうとほっとしてしまう。だから＜３＞＜７＞で作った仕組みは、きちんと確立しないままにいい加減になってしまう。＜30＞で繰り返し繰り返し指導しなくてはいけない。

私だけでなく、この２人の先生も、３日間だけでなく、それ以降のことも考えて、進めていく必要があると主張しています。本書は、４・５月の２ヶ月間でスタートダッシュをすることを提案しています。もちろんは６月以降も大切ですがまずはこの２ヶ月を！　ということです。

子どもたちは様々なことをすぐに身につけることができます。でも、すぐに忘れてしまったり、できなくなったりします。またできたと思ってもまたできなくなることもあります。

タックマンモデルというのがあり、４つの期間を提案しています。

形成期：メンバーが集められ関係性を築いていく時期
混乱期：メンバーの考え方の枠組みや感情がぶつかり合う時期
統一期：共通の規範や役割分担ができあがっていく時期
機能期：チームとして機能し、成果を出していく時期

この形成期が４・５月と考えてください。本書で提案していることは形成期のことばかりです。

担任の先生方は４月、学級経営をとてもがんばられる方がいます。

しかし、そういった先生方から

「GW明けに４月に行ってきたことができなくなっている」

という声を聞くことがあります。私もこれまでにそのように感じることがありました。

これまでの私は、ゴールデンウィーク明け、４月にできていたことができなくなっていることに嘆いてきました。

しかし、よく考えると、本当にできていたのなら、ゴールデンウィーク明けにもできているはずです。

つまり、私たちができるようになったと思っていたことは、実はできていなかったということ、できるようになるための途中だったのです。だから、ゴールデンウィーク明けにできなくなっていたことがあったとしても気にしないでください。まだできるようになるための途中だと考え、５月末までに完成を目指しましょう。

また、それまでにできていなかったことがあったのなら、ゴールデンウィーク明けから取り組んでいきましょう。まだまだ間に合います。４月最初の３日間がすべてではありません。

GIGAスクール時代の子どもたち

「小学校において、言語能力を育てることは大切ですか」と聞かれて、「いいえ」と答える方はいないことでしょう。

また、「小学校において、問題発見・解決能力を育てることは大切ですか」と聞かれても、「いいえ」と答える方はいないことでしょう。

しかし、「小学校において、情報活用能力を育てることは大切ですか」と聞かれた途端、迷われる方や「いいえ」と言われる方がいます。

間違えてはいけないのは、情報活用能力は言語能力、問題発見・解決能力と同等に育てていかないといけない能力です。

だから、タブレット端末を使っていくことはもう必須なのです（情報活用能力＝タブレット端末の操作ではありません。他にもありますが、今回は割愛します）。

全国学力・学習状況調査の調査方法においてもCBTが2024年から中学校から順次導入していき、2025年度以降に速やかに導入をしていくという発表がありました。きっと、2025年以降には小学校６年生でも行われることになります。

2025年に小学校６年生の子どもたちは、現在中学年の子どもたちです。別に全国学力・学習状況調査のためとは思いませんが、タブレット端末に慣れ親しんでおくことは、言語能力や問題発見する力、解決する力と同様に大切であり、必須なのです。

残念ながら、タブレット端末を使う学級と使わない学級があります。昨年度はバンバン使っていたのに、今年度は…。という話が本書を執筆しているときにも聞こえてきました。それが原因で学級が崩壊したという話も聞いたことがあります。

そんな状況です。だから、タブレット端末を使うだけで

この先生はタブレット端末を使う！　すげぇー

となることが多いです。

最初は慣れないかもしれません。しかし、タブレット端末を使うことはもうこれから必須なのです。夏休みや土日などに、タブレット端末を使うという経験を積むしかありません。

本書では、

108ページに「毎朝classroomで連絡」

112ページに「企画書」

113ページに「１週間のふりかえり、来週の目標立て」

114ページに「自分のペースでプリント学習」

120ページに「フラッシュカードが便利」

などのように、すぐに取り組むことができそうなものも紹介しています。どんどん取り組んでいきましょう。

３年生でついに国語科にて、ローマ字の学習をします。だから、単元の時期を入れ替え、４月当初にもってきて、タイピングの練習をしていくように計画している学校も増えてきたように思います。

３年生の１学期には、

１分間で40文字